

東アジア日本語教育・ 日本文化研究学会報告

197

新羅大学院特別教授 藤井茂利

日本の古典と言われている本には種々様々な内容の書物が出版されている。文学作品が主となっているのは勿論であるが古事記・日本書紀のように歌謡や逸話が多く載せられている歴史書も古典扱いになっている。

東アジア学会では古事記・日本書紀の中の古朝鮮と日本との文化交流の関係を論じる必要が生じている。と言うのも最近入会した会員は「日本語とベトナム語比較」とか現在の生活に関する事の発表が主になってきている。古典に関する研究発表も必要であるう。

20年の学会は中止になったが、若しコロナの猛威がなくなり学会（発表会）が開催されるような場合のために、

『日本書紀』の中の「移」の
音仮名

―「移那斯」の「移」を「え」と読む説への懐疑―

という論を用意しておいた。論を進めていくについて欠かすことが出来ないのが、如何なるデキストを使用するかである。

世に「日本書紀」と題して出版されている書籍は数知れずあるが万人が納得する出版物によって論を進めるべきであらう。でなければ学問の根柢が失われることになる。

今回使用した日本書紀のテキストは昭和30年9月吉川弘文堂発行、黒板勝美編集の国史大系本『日本書紀』である。（以下「国史本」と略す）

この書は底本に寛永九年の刊本を用いて編集されているがこの板本は最も広く世に行われていたと考えられ、反点、訓点、句読点を付している価値ある善本である。更に多くの古写本と校合されており、本文の漢字の読みを検討する場合に役立つことになっている。

国史本の漢字の右側或いは左側に付けられたカタカナの読みも読解に役に立つ。日本書紀が編纂された720年にカタカナなどまだ日本では出来てなく国史本に付せられたカタカナは後世のもので付訓全てが正しいとは限らないが参考にする事が出来ると思われる。

一例を示すならば、日本書紀巻9に「波珍」という語が書かれており、これに国史本では「ハトリ」と右側に訓が付けられている。この語は「微叱己知波珍干岐」で人名は「微叱己知」、官位名は「波珍」、尊称は「干岐」となってくるが、人名の「微叱己知」は「ミシユチ」と容易に読めるが「波珍」を「ハトリ」と読むのは難しい。

「干岐」は日本書紀では「早岐」とも書かれているが両方とも「カムキ」とこれも容易に読める。先の記録は仲哀天皇9年新羅王が波沙寐錦、即ち「微叱己知波珍干岐」を質とし金銀綾など80艘の船に載せ日本国に献上した時の記録で、この記事を記す時の日本書紀の編集

者の中に恐らく新羅系の者がいたのではないかと思われる。新羅系の者であれば「波珍」は「ハトリ」と読めたであろうと推察する。編集時にはこの語の読み方を記録する方法はなかったであろうが恐らく言い伝えされたと思われる。平安朝期に入りてカタカナが使われるようになり日本書紀の初めの読み方をカタカナで記録したものと思われる。平安朝の学者が仮令優れた該博な知識を持っていたとしても、新羅国の官吏の位の読み方までが判ったとは考え難いように思われる。「ハトリ」の読み方は、奈良時代に頭の中で保存され、カタカナが出来て漢字「波珍」の傍らに付せられたものと考えられる。

推定によって論を進めているのが類似した行事がおよそ100年後の允恭天皇三年に天皇がよき医者新羅に求め八月に来日、幾時経ず回復、医者に賞を与え帰国させた。と言う記事が見えるが、古事記では、天皇の病回復後、新羅の国王が貢物を船八十艘に乗せてい

る。その折の大使の名前は「金」、位は4位で「波鎮」、尊称に「漢紀」、名前は「武」と言い、薬の知識があり、天皇の病を治した、という記事になっている。

尊称の「カムキ」に「漢紀」が使われているのは古事記のみで「三国史記、三国遺事、金石文」は「干岐、早岐、海干」である。官位の四等（4位）には「波珍」「海干」が使われているが「波鎮」の表記は古事記のみである。恐らく「波珍」とするのを古事記の編者太安万呂は理解できず「波鎮」と音読してそれを表記したものと思われる。日本書紀のように編集作業に朝鮮系人がいたら、意味不明になるような表記にはならなかったと思われる。

国史本の傍訓に「珍」とあるのは注目すべきことの一例であらう。『三国史記』の中に「石山県本百濟珍垂山県」とあり「石」「珍」、「石」の朝鮮語は「トリ」、従って「珍」も「トリ」と読むようになったと考えられている。